

# 教育思想史学会 第15回大会

## プログラム

History  
of  
Educational  
Thought  
Society

2005.9.18(日), 19(月)  
日本大学文理学部百周年記念館

交通案内  
日本大学文理学部百周年記念館  
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 4-2-50  
京王線・東急世田谷線「下高井戸」下車

徒歩 10分  
参加費

[会員]  
一般=2,000円 学生・非常勤=1,000円  
[非会員]  
一般=2,500円 学生・非常勤=1,500円

懇親会費  
〔会員・非会員ともに〕  
一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円  
年会費  
一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円  
事務局からのお知らせ  
大会二日目の昼食については、日本大学文理学部  
キャンパス内の食堂「さくら(福松食堂)」をご  
ご利用ください。美味しい、安いと評判の食堂です。  
懇親会も同食堂で開催いたします。お楽しみに。

-----  
教育思想史学会  
History of Educational Thought Society  
〒214-8565 神奈川県川崎市多摩区西生田 1-1-1  
日本女子大学人間社会学部教育学科内  
TEL: 044-952-6873  
URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/hets/>  
E-mail: [hets@fc.jwu.ac.jp](mailto:hets@fc.jwu.ac.jp)

## Symposium

国家・グローバルゼーション・教育  
提案: 小玉重夫(お茶の水女子大学)  
越智康詞(信州大学)  
野平慎二(富山大学)  
司会: 田中智志(山梨学院大学)

情報・経済のグローバルゼーションという現実がもたらす諸  
効果(それらに呼応して生まれつつある「帝国」[ネグリ/ハ  
ート])のなかで、国家はどのように位置づけられるのか、そして  
教育はどのような機能を付与される(べきな)のか。これが本  
シンポジウムの問いである。

**野平慎二氏** グローバリゼーションは、個人を国家の枠  
から解き放つと同時に、個人を国家の保護から引き離し過度  
の競争にさらしてゆく。その個人を保護するものは、やはり国  
家ではないだろうか。しかし、国家はこれまで、国民を保護す  
るとともに、国民を非国民から区別し、非国民を排除してきた。  
そのやり方を踏襲するかぎり、グローバリゼーションは、国民  
としての要件は何かという問題を生みだす。それは、いいか  
えれば、個人のアイデンティティをどのようにイメージするか  
(共通なものか/多元的なものか、同一のものか/同一化する  
ものか)といった問題である。

**越智康詞氏** グローバリゼーションは、すべてを再帰化・  
商品化し、生きるうえでの自然な支えを奪い、人びとを不安に  
陥れてゆく。その結果、ナショナリズムへの回帰、管理社会化  
による安心確保といった反動的な防衛反応が生じ、新自由主  
義のような適応的な防衛反応も生じる。それらの教育版が国  
民教育の強化、「新しい人材養成」であり、教育の自由化・民  
営化である。こうした教育改革がうまくいくとは考えにくい。し  
かし、グローバリゼーションによって露わになる他者性を承認  
し、あらたな市民的連帯をめざすなら、私たちは未来の可能  
性を見いだせるだろう。

**小玉重夫氏** グローバリゼーションは、ローザ・ルクセン  
ブルクの考え方を借りていえば、資本主義の「外部」(たとえば、  
労働力商品化を拒否しているニート)を顕在化させていく。こ  
の外部を、ネグリ/ハートのように資本主義への抵抗者として  
位置づけるべきなのか、それとも、アレントのように労働価値  
説を相対化するあらたな市民の卵として位置づけるべきなの  
か。すくなくとも新しい「シティズンシップ教育」につながっ  
ていく議論は後者である。

このように、グローバルゼーションの効果については三者三  
様であるが、その多様性は、むしろグローバルゼーションとい  
う現象を立体的にとらえるための足場であるといえるだろう。  
また、グローバルゼーションのなかで教育に求められる機能が、  
大まかにいえば、市民性形成に収束することも、予想でき  
るだろう。問題はまさにその中身である(文責 田中智志)。